

なぜイエスは死なねばならなかったのか

□はじめに イエス誕生の経緯

・・・マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。 (ルカ 2 : 6~7)

イエスは、紀元前7年(6年)頃に、ユダヤのベツレヘムという町で生まれました。母はマリアです。彼女にはヨセフという婚約者がいましたが、二人が結婚する前に、マリアは処女でありながら神の霊、聖霊の力によってみごもりました。神はヨセフに天使を遣わし、マリアがみごもった子は**旧約聖書が預言していた救い主キリスト**(ヘブル語では**メシア**)である、と知らせたので、ヨセフはマリアとの婚約を解消せずに、妊娠を秘密にしました。

しかし、いつまでも隠しておくことはできなかったでしょう。ちょうどそのとき、ローマ皇帝が属国すべてに人口調査をするように命じたのです。二人はイスラエルの北に位置するガリラヤ地方、ナザレという町に住んでいましたが、二人ともユダ族ダビデの家系であったので、本籍地は南のユダヤ地方のベツレヘムという町でした。

二人は戸籍登録をするためという理由を告げて、そうそうにナザレを離れ、身重のマリアをいたわりながら、ゆっくりと旅をしてベツレヘムに来たものと思われます。ベツレヘムには大勢の人々が戸籍登録に来ていて、町の中には十分な宿泊先がなく、ヨセフとマリアは郊外の洞窟を宿泊場所としました。

当時、洞窟は、野で放牧する羊などの家畜を収容する場所として使われていたので、そこには、羊などに水やえさを与えるときの桶が置いてありました。

また、洞窟は、人が死んだとき、その遺体を布でくるみ、安置しておく場所でもありました。乾燥した気候の土地柄、一年もすると遺体は骨だけになります。その骨を集めてあらためて埋葬するというのが、当時の葬りの方法でした。ですから、洞窟には遺体に巻くための布も備えてありました。

ヨセフとマリアは生まれた男の赤ちゃんを、「布にくるんで飼葉桶に寝かせた」とルカの福音書2章7節は記しています。**その布とは、遺体に巻くための布だった**のです。それから、約37年後、紀元30年4月にイエスは十字架刑に処せられました。生まれたときに洞窟の布にくるまれたのは、まさにイエスが死ぬために生まれてきたことを示しています。

では、なぜ、イエスは、無実の罪で死なねばならなかったのでしょうか。

イエスが生まれる約700年前、ユダヤ地方には、「ユダ」というイスラエル民族の王国がありました。そのころの預言者でイザヤという人がいます。預言者とは、神のことばを受けて人々にそれを伝えた人のことです。本日は、**イザヤの預言の中から、救い主がなぜ死なねばならなかったのか、その死の理由**を聞きましょう。

□アウトライン

- A) 見よ、わたしのしもべは栄える
- B) 私たちが聞いたことを、だれが信じたか
- C) まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った
- D) 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない
- E) しかし、彼を砕いて病を負わせることは、主のみこころであった

A. 見よ、わたしのしもべは栄える（イザヤ 52：13～15）

13「見よ、わたしのしもべは栄える。彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。

14多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。

15そのように、彼は多くの国々に血を振りまく。

王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らが告げられていないことを見、聞いたこともないことを悟るからだ。」

1. 13節 わたしのしもべ・・・「主のしもべ」＝メシアの呼称のひとつ
2. 見よ、わたしのしもべは栄える・・・「栄える」は、直訳「賢くふるまう、成功する」イザヤは、「主のしもべ」に関して、すでに次のような預言をしていた。「一見すると彼は使命に失敗したかのように見える」（42章）、「彼の使命には困難が伴う」（49章）。それらの預言を踏まえて、ここで、主のしもべは、その使命に成功する、と言われる。
3. 使命に成功した証しは、3つのステップにより、しもべが高められること
 - (1) 高められて・・・復活
 - (2) 上げられ・・・昇天
 - (3) きわめて高くなる・・・父なる神の右の座に着く
4. 14節 しもべが高められる前に経験すること・・・その顔だちは損なわれて人のようではなく＝イエスが十字架刑の前に鞭打たれた結果である
5. 15節 そのように＝多くの者が十字架上のイエスの変わり果てた姿を見て驚いたように。彼は多くの国々に血を振りまく・・・別訳「彼は多くの諸国民を驚かせる」
6. 王たちは彼の前で口をつぐむ・・・イエスの前で諸国の王たちが口をつぐむことになる。
7. 彼らが告げられていないこと、聞いたこともないこと・・・異邦人にとって、旧約聖書の預言は告げられていないこと、聞いたこともないこと。使徒たちの宣教によって新約時代には異邦人にも知らされ（ロマ 15：21）、イエスの復活昇天を多くの人たちが驚きをもって信じる（15節）が、諸国の王たちや知識人たちの多くは信じない。しかし、彼らが再臨のイエスを見て、口をつぐむ日が来る。彼ら自身の救いという点では手遅れであるが、そのとき彼らは、イエスの受難の意味と目的を理解するであろう。

B. 私たちが聞いたことを、だれが信じたか（イザヤ 53：1～3）

- 1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。
- 2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。
彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。
- 3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、
悲しみ（痛み）の人で、病を知っていた。
人が顔を背けるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

1. 1節 私たちが聞いたことを、だれが信じたか・・・主のしもべ、それも苦難を受けるしもべについての預言をイスラエル民族はずっと聞いてきたのに、イエスを信じない。
2. 主の御腕・・・これも、メシアの呼称のひとつ。イザヤは前の預言で次のように語った。
 - (1) 「主の御腕」は、神にかわって統治する 40：10
 - (2) 異邦人は、「主の御腕」に信頼する 51：5
 - (3) 「主の御腕」が人々を贖う（買い戻す） 51：9～11
 - (4) 「主の御腕」が救いを提供する 52：10
3. 主の御腕はだれに現れたか → 主の御腕は、主のしもべでありイエスであった
4. 2節 ひこばえのように生え出た・・・木の脇芽のように生え出た。価値のない枝として剪定されて、捨てられる。イエスもそのように、切り捨てられた。
5. 砂漠の地から出た根・・・脇芽と同様、実のつかない余分な枝となるので、踏みつけられて折られ、土の中に埋め込まれる。イエスもそのように、踏みつけられた。
6. 彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない・・・
 - (1) イエスには、特に変わったことは見られない。イエスは普通に生まれてきた。それも、貧しい家庭環境に。
 - (2) イエスの子ども時代は、見た目では他の子どもと変わりなく、成長した。
 - (3) イエスの容貌は、特に人の目を引くものではなかった。ごく普通のユダヤ人男性＝ユダヤ風のひげ、茶か黒の目、多分、背は高くない。ハンサムでもない。
7. 3節 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ・・・「人々」は、特に指導者層を指す
8. 悲しみ（痛み）の人で、病を知っていた・・・「痛みと病」、病苦全般を指すことば。イエスは、その公生涯3年半で、特に病気の人たちをあわれみ、彼らを癒やした。
9. 人が顔を背けるほど・・・取税人たちや遊女たちとも食事をするイエス、ユダヤ教の言い伝えを破るイエスに対して、指導者たちは文字通り顔を背けて非難した。
10. 私たちも彼を尊ばなかった・・・イスラエルの人々は現代に至るまで、イエスを悪霊につかれた魔術師であったとか、マリアがローマ兵と姦淫して生まれたのがイエスであったと、言い続けてきた。

C. まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った（イザヤ 53：4～6）

- 4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。
それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。
- 5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。
彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。
- 6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。
しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。

1. 4節 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った・・・

(1) 「私たちの病、私たちの痛み」とは、主を知りながら主に反抗し、**罪にまみれているイスラエルの状態**を、全身が病気に冒されている人の状態にたとえた表現。イザヤは、その預言書の冒頭でそれを語っていた。

1：4～6 わざわいだ。罪深き国、咎重き民。悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。あなたがたは、反抗に反抗を重ねてなおも、どこを打たれようというのか。頭は残すところなく病み、心臓もすべて弱っている。足の裏から頭まで健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてもらえない。

(2) イエスが、「私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」とは、イスラエルの罪を身がわりになって負ったということ。

2. それなのに、私たちは思った・・・イエスが十字架にかけられた時点では、イスラエルの人々はその意味を理解せず、むしろ彼は神によって罰せられたのだと考えた。
3. 5節 しかし、彼は私たちの背きのために刺され・・・「刺され」は「刺し通され」。イエスは、十字架に手足を釘付けにされ、槍で脇腹を刺し通された。
4. 私たちの咎のために砕かれた・・・「砕かれた」、とくに人々からの打ちのめすような悪口、侮辱。
5. 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし・・・「平安をもたらし」とは、私たちの霊的な平安、罪責感からの解放である。イエスが身代わりになって罪を負って死んだことを、私たちが理解し信じたときに、平安を受ける。
6. その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた・・・イエスの打ち傷によって、私たちは癒やされた。イエスが打たれたのは、私たちの身代わりであった。
7. 6節 主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた・・・イエスが苦しみを受けたのは彼自身の罪ではない。主は、私たちすべての者の罪を、彼に負わせた。十字架でイエスはすべての人の罪を負った。（注：次は、一人ひとりがそれを信じて受け取るかどうか、である。信じた人が義【無罪】と認められて、「癒やされた」となる。）

D. 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない（イザヤ 53：7～9）

7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

8 虐げとさばきによって、彼は取り去られた。

彼の時代の者で、だれが思ったことか。

彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から断たれたのだと。

9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。

彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。

1. 7節 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが口を開かない・・・イエスは、苦難と不当な扱いを耐え忍び、自己弁護もせず、不平不満を一言も言わない。
2. 8節 虐げとさばきによって、彼は取り去られた・・・「虐げ（しいたげ）」とは、直訳すると「監獄」。イエスは大祭司公邸の地下牢に留置された。「さばきによって」とは、ユダヤ議会での裁判とローマ総督による裁判である。これらの裁判を経て、イエスは「取り去られた」＝死刑の宣告を受けて、刑の執行がされた。
3. 私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から断たれた・・・「私の民」とはイザヤが属する民族、すなわちイスラエル。「背き」とは律法や法律を破ること。「生ける者の地から断たれた」とは、死刑に処せられたこと。イエスは、イスラエルの罪の身代わりとなって死んだ。
4. 9節 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた・・・死刑執行にあたってユダヤ人指導者たちは犯罪者の墓にイエスの遺体を葬る予定であった。ところが、イエスの弟子でアリマタヤ出身のヨセフという金持ちが遺体の下げ渡しをローマ総督に願い出てそれが許され、イエスの遺体はヨセフが自分のために準備していた新しい墓に納められた。
5. 彼は不法を働かず、その口に欺きはなかった・・・「不法を働かず」とは具体的に犯した罪はなかった、「その口に欺きはなかった」とは心の内側の正しき、清さをいう。イエスには外側にも内側にも罪がなかった、ということ。イエスが死んだのは、自分の罪のためではなく、身代わりであった。

E. しかし、彼を砕いて病を負わせることは、主のみこころであった（イザヤ 53：10～12）

10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは、主のみこころであった。

彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末永く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。

（次の 11～12 節、「 」の中は、神が語られたことをそのまま伝える）

11 「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。

わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。

12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。

彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。

彼は多くの人を罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

1. 10 節 しかし、彼を砕いて病を負わせることは、主のみこころであった・・・イエスを身代わりとして罪を負わせ、死なせることについて、究極的に責任を負うのは、誰か。ユダヤ人でも、ローマ人でも、ない。主ご自身（父なる神）である。
2. 彼が自分のいのちを代償のささげ物とする・・・「代償のささげ物」とは、過失や不注意で犯してしまった罪と、故意に犯した罪の両方について、主の赦しときよめをいただくためのささげ物である。イエスは、自分のいのちを罪のためのいけにえとした。
3. 末永く子孫を見ることができ ⇒ イエスは復活して、子孫（信者たち）を見る
4. 11 節 その知識によって多くの人を義とし・・・「その知識」＝イエスは私たちの罪のために死んだという知識、「多くの人を義とし」→ メシアの死はすべての人のためであるが、その効果を受け取った「多くの人」は、信じた人たちである。
5. 12 節 わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る・・・この訳では、多くの人や強者たちが捕虜となってメシアのものになったように読めるが、原文はそうではない。直訳すると、「わたしは、多くの人とともに彼に分け与え、彼は強者たちとともに分け与える、戦勝品を」。**わたし＝主は、彼＝メシアに戦勝品を与え、彼＝メシアは、戦勝品を分与する。**戦勝品とは、地上に建てられる神の国である。メシアは神にかわってその国を支配する。メシアの下には諸国の王がいてその支配権をメシアは彼らに分与する。**このメシアの傍らには、多くの人とともにいるし、強者たちがともにいる。**かれらは、主のしもべの子孫（信者たち）である。具体的には、新約時代の教会の信者たちと大患難期の殉教者たちである。彼らには、メシアの王国（千年王国）においてメシアの共同統治者としての地位が与えられる（黙 20：4～6）。
6. 背いた者たちとともに数えられた・・・イエスは罪人のひとりに数えられたが、それは他の人たちの罪を負うためであった。
7. 背いた者たちのために、とりなしをする・・・イエスは、死と復活と昇天を経て、今は、天において、信者たちのために、とりなしをしておられる。

まとめ

なぜイエスは死なねばならなかったのか

イエスの死は・・・

- ◇ 私たちの身代わりとして
- ◇ 私たちの罪を負うためであった
- ◇ これは、神のみこころであった

そのことを信じた者を 神は・・・

- ☆ 義（罪のない者）と認め
- ☆ 平安（神との新しい関係）を与え
- ☆ 神の国に入れてくださる